

評者 岩井哲

上山市立図書館長、上山市



佐藤藤三郎著

「亮子よ」

山里にいて、飾り気も付度もないペンを走らせ、社会の移ろいを見続けている佐藤藤三郎さん（上山市在住）が、新著「亮子よ」を上梓した。

2019年6月15日、56歳の若さで亡くなられた愛娘・亮子さんへの鎮魂の書で、一書は圧倒的な言葉から始まる。

「オレは間もなく米寿をむかえる親父だが、お前を眠らせてなどおけない。いっしょに生きる。お前といっしょにまだまだ

愛娘へ湧き出る鎮魂の言葉

しなければならぬことがある。(略)眠ってしまったても生きていける。「亮子よ起きろ」より) 逝ってしまった娘への、尽きることのない父の愛惜の情と読むべきか、それとも「地域創生」を共通のテーマとして闘ってきた同志への届くことのない檄ととるべきか、小生には分からない。いずれにせよ、藤三郎さん

の文章でこれだけ感情を露わにした表現はこれまでなかったように思う。

そんな戸惑いを引きずりながら読み進めていくと、「あの涙は『雪舟の涙』のようだった」の項に出くわす。

「四国の松山で闘病生活をおくっている亮子が、『母ちゃんをつくった納豆汁をたべたい』というので出かけていった。

書けないが、心を揺さぶられる出来事が乗り継ぎの大阪空港口ビーで起こる。そして、その高揚感に満ちたシーンは、とっさに小生が3年前に目にしたとある光景をよみがえらせたのである。

それは、亮子さんが亡くなられてしばらくたったある日、狸森のお宅を訪ねたときの光景だ。焼香している小生のすぐ

(略)五十六歳になる娘に『母ちゃんの……』といわれれば、山形の地ものでなければと納豆をはじめ、納豆汁には欠かすことができない「いもがら」はもちろん、芹、油あげ、人参、牛蒡、こんにゃく、それに葱など、妻のつくったものを主にザックにつめ、背負って出かけた。」

紙幅の都合でその後の詳細は (本の泉社・2千円)